

二代目京山幸枝若プロフィール

本名福本一光。昭和 29 年 4 月 1 日兵庫県姫路出身。初代京山幸枝若と浪花家筆千代(曲師としては京山みつゑ、以後みつゑで統一します)の間の四男として生まれる。生後七か月の頃、初代は女出入に明け暮れて家を出て姫路の芸者と大阪に出奔。みつゑは初代と別れるにあたり、長男のみは小椋姓(初代の本姓)のまま、次男、三男、四男は橋本姓(みつゑの本姓)を名乗らせた。後に次男、三男、四男はみつゑの再婚相手である京山鱗昇の養子となりその本姓である福本姓にとなった。この辺りが二代目幸枝若が初代の実子であることを長らく知らなかった実情である。

学生時代の半ばはフォークソングに熱中して浪曲には見向きもしなかったが、友人が持ってきた実父初代京山幸枝若のレコードを聞き感動してそれから浪曲の道を志した。

その後、初代幸枝若の実子であることを知らされ大きなショックを受けるが、昭和四十六年に先代京山幸枝若に十七歳で入門(あづみパラダイスにて年季明けの披露をしたのが昭和四十八年)し京山福太郎を命名される。この頃は実母の京山みつゑが曲師を務めており厳しい指導でメキメキ腕を上げ、父譲りの美声も相まって若くして頭角を現す。平成 16 年ついに二代目京山幸枝若を襲名。

膨大なレパートリーを初代から受け継ぐ。十八番ネタは『会津の小鉄』シリーズ、『左甚五郎』シリーズなど多数。侠客もの、武芸もの等、硬軟両面に冴えを見せる。

声の良さ、啖呵(会話部分)の良さ、節(地の部分)の良さと三拍子揃った名人。時に放たれる警句の切れ味も絶品。

オリジナルの演歌も発売多数。堅苦しいイメージの浪曲を、「わかりやすく」

「面白く」をモットーに日々舞台に立つ。社団法人浪曲親友協会会長として若手の育成にも精力的に取り組み、浪曲の復興に力を注ぐ。

浪曲衰退の危機感から、大阪では 2015 年 5 月から「浪花ともあれ浪曲三人舞台(なにわともあれろうきよくざんまい)」と題して後輩の春野恵子、門弟の京山幸太との三人会を隔月開催。

2016 年からは、浪曲の牙城、浅草木馬亭において、「京山幸枝若独演会」(制作:有限会社宮岡博英事務所)を年 2 回開催。毎回二席ずつ十八番を披露して大きな拍手を受けている。門弟の京山幸太も毎回前座として参加し、東京における修業の場ともなっている。

この独演会で 2020 年(令和 2 年)度第 75 回文化庁芸術祭大衆芸能部門で大賞を受賞。さらに 2023 年 第 73 回芸術選奨文部科学大臣賞受賞(大衆芸能部門)。

2021 年 11 月にはデビュー 50 周年を記念して浅草木馬亭において五日間連続の独演会『京山幸枝若フェスティバル』(制作:有限会社宮岡博英事務所)を開催。浪曲大看板の連続公演は極めて珍しく絶賛を博す。

2024 年は古希を迎えて、4 月には浅草木馬亭、5 月は大阪国立文楽劇場で、それぞれ二日連続の『古希記念京山幸枝若フェスティバル』を開催(制作:有限会社宮岡博英事務所)。初日は通常の独演会、二日目は浪曲河内音頭を特集し賞賛を浴びる。

後進の育成に最も熱心な一人である。その理由は、「昔の芸人というのは、芸は盗むもので教えるものではないという考えが強かった。それ故に習得

には時間が掛かり過ぎた。今の時代にその方針でやっていたら、浪曲の衰退を食い止めることは出来ず、時間が足りない」

その成果は門人の京山幸太が2022年(令和4年)度第77回文化庁芸術祭大衆芸能部門新人賞を受賞したことにも表れている。

2006年 大阪府知事表彰「芸能文化功労賞」

2010年 公益社団法人浪曲親友協会会長

2016年 第51回大阪市市民表彰(文化功労部門)

2020年 第75回文化庁芸術祭大衆芸能部門大賞

2023年 第73回芸術選奨文部科学大臣賞受賞(大衆芸能部門)

2024年 重要無形文化財認定(人間国宝)。

幸枝若浪曲の魅力

浪曲とは、日本の三大話芸(講談、落語、浪曲)の一つ。しかし浪曲が他の2ジャンルと大きく違う点は、音楽要素が不可欠なことです。曲師と呼ばれる三味線が必須。物語を音楽に乗せて口演する、いわば浄瑠璃と同じ上演形式をとります。

そのために浪曲師は、「節」(地の部分。地とは演者自身が語り掛ける状況説明等叙述的な部分)と呼ばれる演者独自のメロディとリズムを持つ必要があります。

さらに登場人物の会話の部分＝セリフ部分を「啖呵」と呼びますが、ここは正に芝居。演技力で観客を引き付けてこそ浪曲と言えます。

ところが昨今では音楽要素を無視しおかしな音程で大声で怒鳴り上げ、

演じる要素を蔑ろにした音痴浪曲も増えてきておりますが、そういう浪曲は本来の浪曲とは呼べません。

二代目京山幸枝若浪曲の魅力

二代目京山幸枝若（以後、幸枝若）の大師匠である初代京山幸枝が作った息継ぎの間隔が異様に長い”幸枝節”。これは幸枝が和歌山の海辺の出身で、若い時から海に潜って魚介を取って遊んでいたことで肺が鍛えられ、呼吸の長い独特の節が完成したと言われております。今も遺る SP 盤でもその肺活量が確認できます。

その弟子の初代幸枝若（幸枝若の実父）は、幸枝のネタを受継ぎつつも、よりアップテンポで明るくリズムカルな幸枝若節を作り大成功を収めました。

それでも初代幸枝若はこの幸枝若節が現代に妥協しているという悩みを持っていたと言いますから芸の葛藤は奥深いし根深いものがあります。

幸枝若節の特徴として活舌の良さが挙げられます。単語と文脈の明快さは声の良さも手伝って聞きやすい浪曲の最高峰と言えます。

この幸枝若節を直接継承しているのが現幸枝若なのです。

音楽的要素が不可欠な浪曲では曲師の存在は極めて重要です。時にリズムパート、時にはメロディ、時には効果音を受け持つ融通無下な三味線を弾きこなさねばなりません。浪曲師とのイキが合わなければ成り立たないことは言うまでもありません。これで楽譜がないと

いのですから驚きです。近年では幸枝若の曲師は一風亭初月師匠が一貫して受け持っております。その献身的な三味線があつてこそ幸枝若の浪曲が光ります。